THE ROTARY CLUB OF YAMATO—NAKA

大和中ロータリークラブ会報

Discover a New World of Service

見つけよう 奉仕の新生面

1984～'85 R.I 会 長 カルロス．カンセコ

猪熊会長 クラブターゲット 見なおそう 出席・親睦・そして奉仕を・・・

第 343回 例会 60年 5月 2日 第 349号

出席報告

会員数	出席数	出席率	前回の修正
54名	48名	92.31％	100％

欠席者（4名） 病欠（2名）
布施、木村、三浦、渡辺

本日のプログラム	5月 9日
星 幸男 特別代表 イニシェイションスピーチ 竹本正俊君	
次 週 予 定	5月 16日
上田利久君 「次期会長運営方針」	

司会 SAA 古木勝治君
ソングリーダー 中西 功君「君が代」
「それでこそロータリー」

〈ゲ ス ト〉

武田隆弥氏（石川島播磨重工㈱顧問弁護士）

〈ビ ジ タ ー〉

岩間正光君（綾瀬） 野島幸雄君（座間）
川島教男君、境 紀久生君（大和田園）

〈会 長 報 告〉

○ゴールデンウイークの真ただ中にも拘わらず、ゲスト・ビジターの方々及び会員の皆様多数のご出席ありがとうございます。当クラブは奉仕精神が旺盛な為(?)かお休みはないようです。

○高橋さんに米山功労者メダルと楯が届いておりますのでお渡し致します。

○ロータリー財団留学生の迫田さんよりお手紙が届いております。（回覧）

〈幹 事 報 告〉

○青少年会館の駐車場ご利用の方は、ステッカーを必ずご使用下さい。お持ちでない方は事務局でお受け取り下さい。

〈委 員 会 報 告〉

次期プログラム委員会 委員長 橋本健彦君

次年度は楽しいプログラムを促進していこうと思っております。そこでお手許にプログラム委員会よりのお知らせのコピーが届いていると思います。皆様の積極的なご協力をお願いしたいと思います。ご自分でして下さっても、知人をご紹介下さっても結構ですので、お名前、テーマ、内容等をご記入の上、次週ご提出いただきたいと思います。ご提出いただけない方には私共プログラム委員会で

1．真実かどうか
2．みんなに公平か
3．好意と友情を深めるか
4．みんなのためになるかどうか

事務所：大和市中央1－5－40
大和市商工会館内
☎0462－63－7926
例会場：大和市大和南1－4－4
八千代信用金庫大和支店4階
☎0462－64－3654

例会日：毎週木曜日12時30分より
会長：猪熊唯夫
会長イレクト：上田利久
副会長：藤田重成
幹事：伊藤英夫
会報委員：松本(三)・上村・伊藤(宣)

肩たたきをさせていただきますので宜しくお願い致します。

親睦活動委員会　　委員長　後藤定毅君

５月26日(日)に予定しております今年度最後の家族会が間近かに迫りましたので出席確認と集金を次週より行ないます。会員10,000円、御家族8,000円小学生以下6,000円です。尚もしご出席いただけない方は3,000円のご負担をお願い致します。

お　祝　　おめでとうございます！

御夫人お誕生日	土屋翁三君ゆき子夫人	(5月8日)
結婚記念日	二見長幸君	(5月5日)
創業記念日	近藤冨士男君	(5月6日)

基本的な原理

ロータリアンは、助けあうことからはじめました。事実、彼らは毎週、会員同志のあいだで取引きされる商売の総額を記録していたほどです。最初のロータリー・クラブ（シカゴ）では、ビジネス推進委員会なるものまであって、1915年には、175万ドルのビジネスがクラブの会員265人のあいだで取引きされたということを、記録しています。しかしやがて、ちがう目的、つまり、もっとレベルの高い目的のために、意見を交換するほうがビジネスの交換よりも、得るところがさらに多いということがわかってきました。各自がはたらいているところで、ぶつかる問題を話しあい、新しい方法を議論することによって、日常の仕事で直面する課題に対処し、解決しあうことから職業奉仕という基本的な原理を見いだしたのでした。

―― ロータリアン必携
職業奉仕（第３巻）

ゲストスピーカー　　武田　隆弥氏

「江田島教育について」

紹介：本日のゲストをご紹介致します。

武田先輩は昭和18年旧制の愛知一中四年から海兵75期生として、海軍兵学校に入校され終戦時は鬼の一号生徒として江田島に君臨していました。

その後、明治大学に進まれ卒業後、日活株式会社入社、主として企画・総務畑を歩かれ、退職時（昭和45年）は企画部長の要職にあられました。

同年　司法試験に最優秀の成績で合格。その後、弁護士として活躍されていますが、労働問題のオーソリティーであります。

それでは「江田島教育について」と題して卓話を頂戴することとします。（種ケ島）

武田でございます。住まいは百合ケ丘で22年住んでおります。大和には余り参りませんが神奈川県の山はほとんどくまなく歩いております。真冬の丹沢も歩いておりまして４月も３回行っております。明日か明後日又、丹沢に行きたいと思っております。海軍をやめまして山に登るといったところでございます。

昭和60年、戦後40年経って今何故海軍兵学校の教育なのか？ということで種ケ島さんから電話をいただいた時に、〝何故かなあ〟と思ったのですが私が過ごしました江田島の生活につきましてお話をしてみたいと思います。

海軍兵学校と言いますのは旧軍の幹部将校の養成学校でありました。兵学校というのはアメリカのアナポリス、イギリスのダートマスと並び世界の三大兵学校で、なかなか厳しい教育をほどこされました。入学資格は特に決められておりませんが旧制中学校卒業程度ということでほとんどの人がそうでした。昔はとび級の制度があり中学４年でも力があれば

旧制高等学校或は海軍兵学校、陸軍士官学校に入れました。私も幸いにして中学４年生の夏に試験を受けまして合格をしまして兵学校75期ということで入りました。種ケ島さんは実は私の３期後輩の78期で予科生徒といいまして、これは昭和20年にはじめて出来まして、当時旧制中学生は勤労動員で軍需工場にかり出されておりほとんど学問をしていない。これでは入学試験のしようがないし入っても教科をこなせないということで3年生で試験をし４年生の４月に予科生として採用し、佐世保軍港の近くの播尾という所に分校を作り教育をしたわけであります。その１人が種ケ島さんです。海軍兵学校の教育目的は、海軍の艦艇、艦隊、航空機航空隊の各級の士官を養成する事です。但し海軍の教育は非常に複雑な科学技術の枠であります。兵器を扱いますので兵学校の教育だけではとても足りないという事で、海軍では生涯教育という事でありました。海軍士官は、教育が$\frac{1}{3}$、実践配備が$\frac{2}{3}$という具合にして生涯いろいろ勉強を続けさせられてきました。その中の海軍兵学校というのは中央イントロダクション、オリエンテーションの 部門であるというように位置づけられていました。海軍兵学校の沿革ですが、明治政府は海軍を重視し、海軍士官の養成のために大変な人材と予算をつぎ込んでいました。明治政府が発足し明治新年時には早くも築地に海軍操練所を作りました。これが海軍兵学校のはじまりであります。その操練所の名前が兵学寮という名前にかえられました。次いで海軍兵学校というように変わり、それまでは築地にありましたが、東京市が非常に発展し、東京湾の水面も狭く水上の練習が出来ないという事で明治21年に広島県安芸郡の江田島に移転しました。当初は校舎がなく、練習船の中で寝とまりをし練習船の中で教育を受けたという事です。その後赤レンガの明治としましては非常に文化的な建物が出来、兵学校の形が整ってきました。昭和10年に海軍拡張に伴い西生徒館というコンクリート３階建のが出来、その頃兵学校の入学生は学年で200 人でした。旧制高等学校の一校にも充たない人間しか入ってきていませんでした。昭和18年山口県の岩国航空隊の近くに岩国分校を作り、19年には江田島の大原という所に大原分校も作りました。20年には予科生徒の制度を作り校舎を建てました。兵学校の組織についてですが、先ず機構の面では、兵学校の責任者は校長であります。校長は海軍中将がその任にあたるということになっていました。その下に補佐する副校長は海軍少将があたり、その下に文官教官が多数おられました。これと並び武官教官として兵学校出身の海軍士官が監事を兼任するということになっていました。生徒の方は生徒隊があり定員隊がありました。生徒隊は九つの部にわかれ、１つの部の下には10この分隊がありました。兵学校の分隊は完全な自治制度をしいており、この組織は海軍70年の伝統を伝承しなければならないという事でタテの組織で一つの分隊に約50名で、終戦当時は我々75期が最上級生であり、その下が76期77期と３学年が16名位づつ集まり各学生混成で一つの分隊を作りました。これが一緒に生活する訳で兵学校では最上級生が１号、次を２号、１年生を３号といい１～３号まで同じ分隊でタテに並び先輩が後輩を厳しくしつける。海軍の良き古き伝統を支えるといった事に気を使いました。勿論ヨコの組織もあり連絡、会合の制度もあり、同期のつながりは一生続き、運命共同体である。ということを固く叩き込まれました。皆が一つの時計の様に正確に時を刻まないと軍艦なり航空機は完全な作動をしないということで自分だけうまくやれば良い、自分だけ成功すればよいという事ではなくて隣の人間、同期が全部手をとりあって同じ様にうまくやっていくという 連帯責任という事でヨコの制度も重視されました。タテとヨコと組合わさりましての教育を受けて参りました。兵学校の教科内容は就業年限は古くは３年でしたが昭和になり４年間に延びました。が12年に支那事変がはじまりましてから４年間に延びていた 就学年

限がだんだんつまり、昭和16年17年入校の生徒は２年４ケ月で卒業せざるを得なかったのであります。兵学校の教官は概ね旧制高等学校の理科甲類プラス旧制工業専門学校の機械工学科の基礎的な科目を教えるということでした。教科編成は普通学が75％、軍事学が25％という事で普通学が重視され特に重視されたのが数学で徹底的に叩きこまれました。入学試験でも40％のウエイトは数学におかれていました。次に重視したのが英語です。戦争中英語を使うと非国民扱いをされたのですが兵学校では逆に校内の普通名詞はやたら英語が使われていました。使いやすいもの、正しく意味を伝えるものはちゃんと使おうではないか。又、いかに敵国であろうとも正しく相手を評価しようではないかということを叩きこまれていました。

次に重要なのが教科と並び訓育という問題でこれは一口で言いかえるなら「しつけ」ということであります。これは訓育という時間があった訳でもありませんし、講義を聞いた訳でもありません。しかし兵学校は365日休暇を除き24時間兵学校にいる訳であり寝ている間を除き起きている間は訓育という観点から一号生徒から絶えず厳しくしつけられました。訓育の中で大事にされていた事は機敏な動作、時間厳守、清潔整頓、身だしなみでした。機敏な動作ということについては階段は登る時は如何なる場合でも一段おきに、降りる時は一段ずつかけおりる。というルールがありました。時間厳守という事については、海軍全般で５分前に必ず現場にいて５分間に段どりを考える、という事になっていましたが、兵学校では更に作業開始、集合場所の５分前の５分前即ち10分前には現場にいるという教育をされ、その５分間を大いに利用するということも、時間を大事にするという事もしつけられました。

清潔整頓については徹底的に言われました。もし病気が発生した場合、軍艦は逃げ場がない。隔離する事が出来ないという事です。身だしなみについては外出の時靴のカカトまできれいに磨いてないと磨きなおしで外出はストップという事でした。自分の身づくろいをきちんとする事により気持が引きしまるという事で洋服にはブラシをかけ靴はピカピカにということを叩きこまれました。

最後に如何に海軍生徒の教養ということに気をつかっていたかといいますと18年に入校し分隊の自習室の机の中に教科書類が入っているのですがその中に「音楽のしおり」という分厚い本が入っていました。音楽にはおよそ気がなかった私ですが、休憩時間に読んでみてシンフォニーとは何か組曲とは何か、とかオーケストラの編成など‥‥の事を知り、レコードを聞いたりして初めて音楽の楽しさ面白さを知りました。ただ単に学問の教育だけでなく日常の生活を通じて人間として、かくあるべきだという事について非常に意を配り、気をつかってくれたということは現在私がここにあります何割かは兵学校の教育のお蔭だったと感謝している次第です。

〈スマイルボックス〉　委員長　北砂富三君

岩間正光君（綾瀬）　お世話になります。

野島幸雄君（座間）　いつもお世話になります。宜しくお願い致します。

川島教男君（大和田園）本日はお世話になります。

境　紀久生君（大和田園）本日も宜しくお願い致します。

土屋翁三君　①家内の誕生日お祝いいただきありがとうございます。暗黒の40才と言っております②たびたびホームクラブ欠席してすみません。これからもよく欠席しますが忘れないで下さい。メークアップは100％しております。

二見長幸君①結婚記念日のお祝い有難うございます。②小学校の校長先生が上村さんに校内塗装して貰い大変喜んでおられましたので。

近藤冨士男君　創業記念のお祝いありがとうございます。

高橋政勝君　米山功労者をいただきました。ジバクの賞であります。今後ともご協力をお願い致します。

松本三郎君　後藤さん、先日はありがとうございました。今後とも宜しく……。